

子どもの学びの支援のあり方と大学での学びのあり方の考察 ～学力向上のための手だて～

Support of Children Learning and Development & Analysis of Learning Methods at College

～Todate-Effective Ways to Improve Academic Performance～

藤 池 安 代*・正 道 幸 子**

要 旨

「教職実践演習」や「児童教育学基礎演習」の中で、教師としての力量を高めるための手だてを考察する。具体的には、学生が力量形成で重要であると位置づけている特別支援教育や学力に課題がある児童への支援のあり方について、小学校で実際に実践し、成果を上げている取り組みを学ぶ中で学生の教員としての力量形成のあり方について考察を加えた。

キーワード：グレーゾーンの子どもの理解、学力向上、教師教育、授業構築、授業力向上

1. 研究の目的

すべての子ども達の学力向上を目指して、各学校では様々な工夫がなされている。

これまでに、「学力に課題のある子ども達の支援方策を探る」をテーマに、放課後支援を実践例にして取り組んできた。その中で、①学力に課題のある子ども達の支援と学級全体の児童との学力向上について ②学力に課題のある子ども達に対する支援体制について ③学力に課題のある子ども達への効果的な指導法とは ④学力に課題のある子ども達への外部支援について等 の研究を行ってきた。その過程で明らかになったことは、現職教師への研修と同様に教師を目指す学生にも、幅広い意味でのグレーゾーン（ここでは「学力に課題のある」で統一）の子ども達の理解と指導のあり方について教師の大切な力量として習得する必要があると考え、テーマに沿って考察してきた。

2. 学力に課題のある子ども達のとらえ方

学力に課題のある子ども達とは、人生において必要な「確かな学力」を身につけないまま大

* 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 教授

** 神戸市立成徳小学校 学ぶ力・生きる力向上支援員

人になってしまう可能性のある子ども達ととらえている¹⁾。

「確かな学力」とは、最低限の基礎学力、つまり、大人になって社会生活を営む為に必要な「読み書きそろばん」と言われていた力が基盤になるものであると考える。それは、義務教育の間に当然身に付けなければいけないものであるが、すべての子どもが確実に身に付けられているとは言えないのが現状である。また、そのような学力をしっかりと身につけられなかった子ども達が社会に出てからの苦勞は、計り知れないように思える。

「京都における発達障害と非行の関係」²⁾を統計にして紹介した中では、京都少年鑑別所に入所する全少年の平均IQは、80台後半とされ、軽度知的～境界知能の少年院生が多い事が明らかにされている。このような子ども達は、普通学級に通い、合理的配慮がなされないケースが多々あり、負の連鎖に巻き込まれるリスクが高いともいわれている。また、読売新聞に掲載された「大人の発達障害」³⁾でも、41歳になって初めてLDの診断を受けた男性は、「学校の勉強は全然できなかった。のんびりした時代だったから、やり過ごせたのかもしれない。高校卒業後に保守をする部署に配属されたが、業務を指示する文書を手渡されても内容が理解できない。『やる気があるのか』『自分で考えろ』と叱責される度に頭の中が真っ白になった」と、大人になって直面した困難について語っている。

そのようなことを事前に防ぐためにも、全国的に行われている「全国学力テスト」が、すべての子ども達に確かな学力がついているのかどうかの検証であれば、意義深いものになると考えられる。子どもの為の早急な支援策は、多くの子ども達を救うことになるが、全体的な底上げを行なうためには、様々な問題が存在している。自身のこれまでの教職経験からも、初期の頃から、軽度の知的障害やLDの児童達は、クラスの中に2～3名はおり、個別指導などを行ったり特別な課題を出したりすることも行ってきたが、すべての子どもの基礎学力の定着までは、一人の学級担任として学校教育の中で行うことはできなかった。しかし、数十年前の方が、そのような児童達の特性を生かした将来への道が今より多く存在していたように思える。走りが速い子、虫取りが上手な子、力が強い子など…。行き過ぎた平等主義も、このような児童にとって貴重な特性への気付きをなくしてしまっているのではないかと考えられる。

前述したように、現在は、注意欠陥多動性（ADHD）・アスペルガー症候群・高機能広汎性発達障害などの障害も加わり、クラスの中には、5～6%の割合で存在しているといわれている。明らかに20年前頃までは、静かでおとなしかった1年生が、今では、学級崩壊を起こしている例もあるように一斉授業が成立しにくくなってきている。このような状態の中では、授業が成立しない為にますます基礎学力を身につけないまま学年が上がってしまっている児童（学力に課題のある子ども達）が増えざるを得ない状況と考えられる。

（1）学力に課題のある子ども達の実態

どんな高成績の児童・生徒を集めた学校でもその中で順位はつけられる。一般的に集団の中

では、正規分布が起こるといわれている。もし、学級の中で下位にいる児童が、到達目標に達していれば問題はない。集団全体が常に目標を達成していれば、「学力に課題のある子ども達」は存在しない。しかし、現実はそのようではない。常に下位の児童は、小学校6年間下位を続けている場合が多く見られる。「分からないまま」という負の連鎖が起こっている。日本の学校制度では、落第で異年齢の児童がクラスにいることは、ほとんど見かけない。年齢相応の基礎学力がついていなくても進級し卒業を迎える。中国のある学校の小学1年生は、学年末の学力テストで合格しなければ落第、だから必死に勉強をすると聞いたことがある。アメリカのスピルバーグ監督は、LDのために3年落第をしたという記事も読んだ。落第は、辛いものであるが、基礎学力をつけてから進級することが当たり前とされていけば、特別な存在で無くなり、授業にもある程度ついていけるのではないかと思われる。落第制度は、精神面からも決して賛成できるものではない。しかし、一斉授業が理解できないまま授業を受ける苦痛と、どちらが子どもにとって幸せなのか疑問である。大人になって学びなおしている人達もいる。きちんと基礎学力をつけて社会に送り出すことの方が、一生のことを考えると幸せなのではないかと思われる。そして、予防的支援という発想は、その子の人生を左右する重要な支援なのではないかと考える。

ひとまとめに学力に課題のある子ども達と述べているが、その中には、様々な要因も関連していると思われる。この関連もその子を取りまく環境や低学力の要因としてきちんと把握しておかなければならない。

① 「不登校児童」との関連

「学校心理学から見た教育相談・学校指導—予防的・開発的視点に焦点を当てて—」（藤岡2010）では、文部科学省の学校基本調査（2009年速報値）によれば、全児童・生徒数に占める「不登校」の比率は、小学校では0.32%、中学校では2.89%で、15年前の1994年の小学校では0.17%、中学校では1.24%で、不登校の比率が15年間で2倍近く増えていることを指摘して、治療的教育相談に傾斜しがちな現状を捉え、予防的・開発的教育相談や予防的・開発的生徒指導の必要性を指摘している⁴⁾。不登校で別室登校していた小学5年生と6年生の児童は、おとなしく授業の邪魔にはならないが基礎学力は低い。特に5年生の児童は、5年生になり自分の周りの児童との学力差に気づき不登校が始まった。1年間別室登校で基礎学力をつけさせ、少し自信をつけたことと、周りの児童と担任の援助で何とか6年生になった時には、教室に戻ることができた。声を出して「わからない!」と言わない子どもは、学力に課題を残したまま進級しているのが現実である。「授業が分からない」「遅れていて恥かしい」「学校へ行っても面白くない」から「頑張れば出来る」「分かるから面白い」と思えるようになると登校出来るようになってくるが、不登校の期間の学習が抜けていたり、基礎学力をつけるために費やす時間がかなり多かったりすることを考えれば、そうならない方策（登校出来ているうちにしっかり基礎学力をつけさせていく）が望ましいといえる。

また、不登校児童に対する担任のケアは、重要であり、日常的に多くの時間と労力が要求される。不登校児童が減ることは、児童本人の幸福に繋がるとともに担任が学級のより多くの児童に関われる時間を生み出すことにもなると思われる。

② 発達障害との関連

発達障害の児童がクラスの中には、5～6%の割合で存在しているといわれているにもかかわらず、1～4年生までは35人、5、6年は、基本的には40人学級のまま続いている。欧米などの20人程度のクラス編成には及ばない。このような状況の中で、一斉授業をどのように効果的に行っていくか、また、個別の支援は、どのような方法で行えばよいのが緊急の課題であると思われる。しかし、本来なら、「IDEA2004の制定に伴う合衆国における障害判定・評価の在り方の変容について」⁵⁾(2009川合紀宗)にあるようにRTIによる教育効果の公的な調査が行われているが、アメリカではIDEA1997法の改正法が可決され、IDEA2004法の目的である

- ① 障害のある児童すべてが無料で個々のニーズに応じた公教育を受け、将来高等教育の享受や就職、独立した生活ができるよう準備を行う。
- ② 障害のある乳幼児とその家族を支援するための早期教育・支援をあらゆる専門家や機関が連携して行うことができるよう、それらの機関を管轄する州を財政的に支援する。
- ③ AACなど支援機関の開発このような改良、またそれに関わる研究を支援し、教育者や保護者が障害のある児童生徒に対する教育支援効果を高めるために必要となる機器を保有することができるよう支援する。
- ④ 障害のある児童生徒に対する教育支援効果を評価し、それが向上していることを常に確認すること、が公的機関で取り組まれている。このようなことが日本の公教育の中でも取り組まれていれば、発達障害児に関しては制度が整っているので放課後支援は必要ない。しかし、日本の普通学級に在籍する発達障害児は、グレーゾーンに属している可能性が高い。放課後支援では個と向き合う指導が行えるので、指導の効果面ではなかなか難しいものがあるが、少しでもできるようになったという自信をもたせることはできると考えられる。

③ 「外国籍児童」との関連

外国籍児童の一人は不登校児童で、母親が日本語を話せず、日本の文化にも馴染めずにいた。「すくすく教室(後述)」にやって来た3年生の外国籍児童は、家庭に日本語を話す人がいなく、2年生から入学してきたが基礎の計算力が不十分だった。ポルトガル語は、母親との会話に使っていたため流暢で、NPO法人の主催する会に学習支援と母国語の維持のために通っている。普通児に交じって元気に遊んでいると、すべて理解出来ていると誤解してしまうが、些細な言葉の意味まできちんと理解出来ていないために学習の遅れが見られた。このまま、6年生までいくと、積み残しが多く学力不振に繋がっていくことが推察される。後の事例研究で成果が明らかになるが、何がどう分からないかを個々に対応して指導していく中で、大きな伸びが見られた。

④ 家庭の経済状況との関連

2012年7月6日の神戸新聞で、「家庭間の経済的な格差が、子どもの学力や進路などに影響し教育格差を生む。ことしの文部科学白書は、全国学力テストの結果で明らかになった問題点を指摘し、教育への公的投入の拡大が必要だと強調する。…塾など学校外教育に支出する余裕があるかどうか、格差の要因になっている。」と述べられている。学校の学習時間内で完全に習得できる児童は大丈夫であるが、無理な児童は学校外教育に委ねられてしまう。しかし、経済力によって十分に補うことができない児童もいる。また、塾でも個別の指導を必要とするなら、個別指導を選ばなくてはならない為に経費は1.5倍ぐらい高くなるのも現実である。

⑤ 学級崩壊などとの関連

常にこのような事情があってはならないが、現実問題として学級崩壊やしっかり学べない環境の学級の問題がある。こうした中では、担任が個への対応を行う余裕はない。この一年間の学びの欠如は、学力に課題のある児童にとっては大きなマイナス要素となる。

以上の観点から、普通学級における学力に課題のある児童の放課後支援は、学力に課題のある子ども達を生まない為の予防的支援であり、この取り組みを実施することで授業が進行しやすく、ひいては学級全体の学力を伸ばす上でも意義あるものと考えられる。

(2) 学級経営の実態と望ましい学級経営のあり方

学級経営は、教師のカラーが出る。小学校では、受け持つ教科が多い。それだけ、児童はその教師のカラーに染まる。また、そのカラーに合わない児童もいる可能性もある。しかし、最も大切なことは、すべての児童がしっかり話を聞こうとしていること、そして、内容を理解していることである。これが出来ない環境の学級は、学ぼうとしている児童の成長を妨げているといえる。また、一部の学力の高い児童だけが理解できている授業も学校としての意味をなしていない。

学校とは、多くの児童の様々な考えが集まり、より深い思考を導き出すものであり、それぞれの分野で優れた児童が他の児童に教えることで高め合える集団であると考えられるからである。

今、若い教師が増え、指導ができる立場の教師の数が減ってきている。若くてもその若さを生かして、日々勉強しながら頑張っている教師もいる。もっと多くの素晴らしい学級経営のノウハウを自分の授業時間に子ども達を自習させて研修として参観するのではなく、僅かな時間でも毎日廊下を歩く時に板書をのぞいたり、放課後に教室掲示を見せてもらったりするなど、積極的に学ぼうとすることが大切である。そして、学ぶべき先輩に遠慮せずに話を聞きに行き、真似をすることが始まりではないかと考える。また、もっと本を読み調べるなど、日々教材研究を欠かさず、楽しんで授業の工夫や準備が行えることで学級は変わると考える。

(3) 放課後支援とその指導方法（計算・漢字学習の進め方）—H23～H29実施内容—

〔放課後支援〕—「すくすく教室」の意義

教室の中での授業で、読み書き計算が出来ない、速く出来ない、覚えられないなどのために授業についていけない、ノートをとる時間がない、思考活動よりも計算に時間を費やしてしまう、宿題に時間がかかり過ぎるなどの弊害を少しでも緩和する為に、個別にその子に応じた支援方法で計算力・漢字力などをつけていく。

* 指導方法・内容・人員は、前年度の反省をもとに改善を重ねる。

* 2年生への漢字支援は、H28年度からスタート。

〔指導方法〕

〔2年生すくすく教室〕—成徳漢字検定で100点がとれる力に加えて、2学年時に前学年（1学年で学習する80字）の漢字が正しい筆順できちんと書けることを目標として取り組ませる。その他、ひらがな、カタカナ、鉛筆の持ち方、学習時の姿勢などは、個に応じて支援をしていく。

〔3年生すくすく教室〕—計算力の達成目標として、学年全体の授業で取り組んでいる百マス計算テスト（足し算・引き算・かけ算）、わり算25問テスト（あまりのあるわり算）の全員の到達目標である5分以内100点を達成させる。（足し算・引き算・かけ算・わり算の習得方法は、支援員で相談しながら個に応じた方策で習得させていく。）

すくすく教室の講師は、それぞれの力量で教師経験からの独自のスキルや教具をもちより、個に応じた支援を行い目標を達成させるとともに、児童退出後の時間に振り返りとともにお互いのスキルを共有しながらより良い支援を行う。また、様々な要因をかかえる児童に対してメンタル的な支援も行う。また、児童引き渡し時に担任と現状を共有するとともに、スキルや教具なども現職の教員に伝えていく。

以上のような目的と支援方法で漢字の習得（2学年）、計算の習熟（3学年）を目標として、各学年週1回1時間の放課後学習支援教室「すくすく教室」を下校時が高学年児童と同じになり、下校時の安全に配慮して6校時に実施している。

(4) 外部講師の導入と支援体制

〔外部講師の導入〕—支援要員としての教職経験者

シルバー人材（退職教職員）や早期退職教職員（結婚・子育ての為）の活用（ワークシェア）は、高齢化社会の中で有用な方策であると考えます。

教育課程の改訂で教師は、授業に追われ単元を終わらすことで精一杯になっている。このような状況では、どんどん落ちこぼしが生まれてくるのも当然であろう。やはり、どんなに学習内容が増えていこうとも学校全体でゆとりをもって、しっかり基礎固めの時間を設定していく

べきではないかと考える。日々の忙しい生活の中で、どのように基礎学力の習得の徹底に時間をさいていくかは絶対の課題である。しかし、全てを教師達だけで背負うのでは、どこかで無理が生じるか、最初から出来ないこととして諦めてしまわなければならない。

「新・寺子屋宣言」では、地域の教育力の蘇生の一環として家庭塾運動を展開している⁶⁾。素晴らしい活動であるが、神戸市全体で…となると時間がかかると思われる。それなら、公的機関が行う学校外部支援事業の一環として、シルバー人材（教職経験者）のワークシェアの発想も考えられるのではないであろうか。基礎学力の定着支援の人材を確保し利用していくことで、そのような時間を作り出し、学力に課題のある子ども達の基礎学力をつけさせていくことが教師の都合（会議・出張など）に関係なくできる。

そして、発達支援児童を含め、基礎力の定着の場としての取り出し学習には、様々な難しさがあり、個々のケースに対応した支援が必要となる。しかし、リタイアした教職経験者達は、様々な方法を駆使しながら、学力に課題のある子ども達と格闘してきているはずである。また、学生サポーターや地域の人材は、教師からの指示が必要とされ、守秘義務などの面でも問題がないとはいえない。その点でも、リタイアした教職経験者達は、現役時代に十分対応してきていると思われる。

したがって、放課後の学習教室などのシステムが常設されていれば、週一回1時間程度なら日常生活にあまり影響がないと思われるので、取り組んでみてもよいと支援者の人数も増えると考えられる。もともと、子ども達が好きな人材でもあるので、生きがいをもてるボランティア活動として、また、コミュニティの一員として学習支援のみならず、学校支援も可能である。そして、その小学校まで徒歩圏内又は、近隣に在住する地域の人材として常に子ども達を見守ってくれるという面からしても望ましい。

シルバー人材の活用は、学習支援だけでなく、そのような様々な支援、つまり、「コミュニティ教育論」で述べられているようなコミュニティ・スクールへと結びついていく可能性もあると考えられる⁷⁾。

（支援体制—H29年度）…過去の実践の反省をもとに現在は、支援員1名に2名の支援児童の体制で、2年生、3年生ともに行っている。特別支援員を設け、支援員の欠員対応や1対1の個別の取り出し学習にあたる。

- ・支援員—2年（5名）、3年（5名）
- ・支援対象児童—2年（8名）、3年（8名+不登校傾向児童1名）

以下の手順と内容で実施

H29 2年「すくすく教室」指導手順と内容

- ・支援員（5名）—2時25分来室（準備。今日の指導の確認。）
- ・支援児童（8名）—2時45分までに児童来室（時間厳守）

(指導内容)

1. 漢字検定⑰ (⑰満点児童は⑱を行う。) — 1年成徳漢字検定プリントは⑰と⑱
2. 先週と同じ漢字5問テスト (1年学習漢字80字を5字ずつに分けた16枚のテスト)を行い、定着を確認。
3. 今日の学習の目標を確認。
4. 1年生の漢字5問プリント (全16枚) を筆順の確認をしてから、練習。
5. 練習した後、漢字5問テストを全問正解したら、次のプリントへ。間違いがあれば、その漢字の練習をしたあと、再テスト。
6. 漢字5問テストの新しいものを練習用に宿題にして定着をはかる。
(次週、同じテストを行い、定着を確認してから、次のプリントへ進む)
7. 学習のふりかえりは、テストの直後に記入するか最後にまとめのふりかえりとして書かせる。

* 特別支援員は、1名ずつ順番に取り出し、1対1で「あいうえお」をなぞる(「あいうえおボード」を回して書き順チェック)。平仮名チェック終了後、「カタカナ」チェックも行い、結果を各担任に伝え支援につなげていく。

* 1年生の漢字80問がきちんと書け、漢字検定⑰⑱が1回で合格できた時点で、卒業とする。(卒業は、個人別になり、その後、出来るだけ早く次の児童を入れる。)

(下校指導)

- ・ 2時30分学習終了。
- ・ 2時40分までに個人別の今日の学習のふりかえり (卒業まで保存) を書かせる。
- ・ 2時40分頃すすく教室に各担任が来室。
- ・ 各児童は、今日のふりかえりのコピーを学級担任に見せて褒めてもらう。(担任が出張や欠席の時は、他の担任が兼ねる。)
- ・ 支援員は、担当児童の担任に簡単に様子を伝えて引き渡す。
- ・ 担任は、児童を連れて校門まで送る。
(次週の打ち合わせ)
- ・ 児童下校後、すすく教室の部屋で今日の状況と教材検討などの打ち合わせを行う。
- ・ 施錠・準備物を片付ける。

H29 3年「すすく教室」指導手順と内容

- ・ 支援員 (5名) — 2時25分来室 (準備。今日の指導の確認。)
- ・ 支援児童 (8名) — 2時45分までに児童来室 (時間厳守)

(指導内容)

1. 足し算・引き算・かけ算・あまりのないわり算・あまりのあるわり算を授業の進度などを考慮して出来るように、様々な支援方法でトレーニングをさせる。
2. 出来るようになったら、百マス計算テストなどのテストを行う。

3. 四則計算が、百マス計算テストは5分以内100点、わり算は到達目標タイムに達するまで、反復練習を行う。
 4. 学習のふりかえりは、テストの直後に記入するか最後にまとめのふりかえりとして書かす。
 - * 特別支援員は、1名ずつ順番に取り出し、1対1で百マス計算やわり算テストを行い、1対1の支援の時間をもつことでより詳しく児童のつまずきの支援にあたり、結果を各担任に伝えていく。
 - * 四則計算全てが、達成目標まで達した時点で卒業とする。(卒業は、個人別になり、その後、出来るだけ早く次の児童を入れる。)
- (下校指導)(次週の打ち合わせ)は、2年生と同様。

(5) 子どもの学びとその成果

「3年すすく教室」では、基礎計算力をつけるにあたって、流暢性と正確さを大切にしました。タイムを計ることで、速く正確にしかもできた達成感を味わわせることより学習へのモチベーションを高め、自信をつけることができた。(タイムを計ることに抵抗がある児童も少しでもアップしたり、正解が増えたりすることを目標にさせていくと張り切って取り組んでいた。)以下は、第1期～3期までの成果と考察と感想である。

- * 平均短縮時間—同期の対象児童の支援前(事前)のタイムと支援後(事後)のタイムと比較し、どれだけ短縮できたかを時間であらわしたもの。
- * 範囲—個人別の短縮時間の幅

表1 第1期 対象児の平均短縮時間と範囲

テスト	平均短縮時間		範囲	
	事後	4か月後	事後	4か月後
足し算百マス	6分58秒	6分57秒	2分52秒～20分	3分27秒～19分22秒
引き算百マス	7分15秒	5分36秒	3分5秒～12分38秒	2分54秒～10分10秒
かけ算百マス	4分57秒	4分19秒	1分56秒～9分16秒	1分10秒～9分3秒

(第1期考察)—4ヵ月後

- * どの児童も3年生の開始直後の所要時間には戻っていない。ある程度最終成績に近い定着度が見られる。
- * 自信をもつことにより、より多く練習しようとする意欲がわいてきていると思われる。
- * 一番所要時間を測るのに緊張が強かった児童の1人は、自信をつけ所要時間を伸ばすことに意欲的になり、4か月後も伸ばしているのが確認できた。
- * 計算能力がアップすると計算をすることに疲れなくなるためか、楽しんで検証に臨んでいた。

表2 第2期 対象児の平均短縮時間と範囲

テスト	事後	事後
足し算百マス	7分5秒	1分41秒～16分22秒
引き算百マス	4分25秒	3分2秒～5分50秒
かけ算百マス	5分48秒	46秒～10分54秒

(第2期考察) — 4か月後の検証は、支援員の職場移動の為にできていない。

- * 一人は、不登校傾向児童であったが、3名が仲良くなるにつれて学習への意欲が高まり、学校へも少しではあるが、来やすくなってきた。
- * 1期同様、自信をもてるようになってきた。

表3 第3期 対象児の平均短縮時間と範囲

テスト	平均短縮時間		範囲	
	事後	4か月後	事後	4か月後
足し算百マス	2分36秒	2分27秒	52秒～5分6秒	1分23秒～19分22秒
引き算百マス	6分8秒	4分36秒	2分52秒～13分48秒	2分8秒～9分35秒
かけ算百マス	1分59秒	1分43秒	-17秒～4分17秒	-32秒～4分7秒

(第3期考察) — 4か月後

- * 1期、2期と同じく自信や意欲にはつながっていった。
- * 家庭の事情もあり、ほとんど宿題をしてこなかった児童が少しずつ宿題に取り組むようになってきた。
- * 1人は、4ヶ月後に久しぶりに百マス計算テストを行うと、引き算が速く出来る計算方法を忘れていて、少し元に戻って9分かかっていた。復習すると、2回目は速く正確にできた。このまま忘れたままで出来なくなってしまう可能性もあったが、復習をすることで元の力を発揮出来るようになった。(児童によっては、継続的な支援が必要である。)

(担任の感想)

- ・ すごく助かっている。何よりも表情が豊かになっているのが嬉しい。
- ・ 子どもの変化を目の当たりにし、今後の教師生活にも役立てることが出来そうだ。支援児童にとっても期待している。
- ・ 週1回、しかも短い時間でこんなにも自信をもつことができ、意欲的になれているのかと驚かされた。逆に、これまで自分もってやれなかったことを反省している。これからも教室で支援児童の活躍の場を増やし、自信をもたせたい。
- ・ 支援児童が、精神的に落ち着いてきているのが良くわかる。自信も少しずつついてきているように思う。
- ・ 本人にとっても保護者にとってもありがたく自信につながる時間である。

〈保護者の手紙〉

2年生までは、難しいから諦めていたのが、今では、やってみようという気持ちをもってくれ、少しやり方を教えるとすんなり進むことが増えて、とても嬉しく思います。

本人も自信がもてたのが、「すくすく教室」でやった成果を私に見せてくれたり、もっとタイムを縮めるように努力してくれたりするようになり、すごく変化してくれた所だと思います。できれば、1時間だけでも少しでもこれからもしていただけると嬉しいです。「すくすく教室」は、嫌がらずに行ってくれていたのよかったです。

現在は、第7期に入って、2年生の漢字指導も行っている。（「2年すくすく教室」では、1年取り組むことで、1年の漢字80字は、全員ほぼ習得することができた。）

支援員も増え、支援方法も常に検討しながら行っているが、今後もより良い支援法を探っていきたい。

3. 大学での授業のあり方

特別支援教育や学習面での配慮が必要な児童に対する理解とその指導に、不安を抱えている学生が多い。特に、小学校では現在どのような取り組みをしているのか、具体的な子どもの実態や指導のあり方等について学びを深めたいとの願いをもつ学生が多くいる。その強い願いに応えるべく、小学校で研究実践に取り組む正道幸子教諭と連携を図り授業に取り組んできた。

今回、学生の学びを分析し、教員としての力量形成のあり方について考察した。

(1) 学生のグレーゾーンのとらえ方

レポート等から「グレーゾーンの子ども」を発達障害の一部としてとらえている学生が多い。学校教育の中では、配慮が求められる特別支援の範疇と授業理解に時間がかかり学力的に困難な児童を「グレーゾーン」と使うことが多い。

〈学生（20人）のレポートから〉

グレーゾーンの子ども達とは

- ・支援が必要なのか個性なのか
- ・障害があるのか、ないのか、「普通に限りなく近いけど集団の中でうまくいかない子ども達」
- ・学校生活での困り方－発達の遅れ、学習の遅れ。友達関係の問題、集団に入れない
- ・何かがあやふやな子ども達
- ・発達障害児について、二次的被害、学力面の遅れ－思考力、表現力の低下、自己肯定感低下、誤解、いじめ
- ・定型発達の子とグレーゾーンの境界線のはっきりしたものはない
- ・発達障害、日常生活困難、パステルゾーン、カラフル、スペクトラム、その他
- ・発達障害ではない人に見られる課題

と、グレーゾーンの子どもについて上記のようにとらえている。

(2) 学校ボランティアやキャンプ、自然学校等で出会った子どもたちへの支援

学生の多くは、学校ボランティアや野外活動に参加し子ども達とのかかわりを深め、そこで出会う教師や指導者の技術を学ぼうと努力している。その活動では、配慮を要する子どものサポートをする機会が多いため、担任に指導を受けてのサポートや自分で試行錯誤しながら、または、体当たりしたりして子どもとの距離を縮めていこうとしている姿が見受けられる。

そんな中、担任なりに努力する人やその子に全く対応をしているとは考えられない場面に出会う学生が苦悩する姿が浮かび上がってくる。そこには、担任としての少しの配慮で子どもの成長・理解に大きな違いがでてくることを学生たちは実感している。

以下は出会った子どもとの関わり

- ・2年男児…声をかけても無視。1か月半後、「先生が来てくれると安心する、離れたくない」
⇒注意する時、その子と真剣に向き合い、声をかけても無視されることがあっても「おはよう」等の声掛けを続け、授業中もその子のそばに居続けた結果である。
今でもその子への対応は、それが良かったのか不安に思う。
- ・スクールサポーター…4年男児、すごく甘えん坊ですぐに抱きついてくる。独り言、集団行動が苦手、同じ質問をくり返す（軽度の自閉症）。
一人の子どもとしてちゃんと会話の受け答えをする。指示があいまいだと男児は不安、何をしたらよいか分からない。「できた」という達成感が味わえない←具体的に分かりやすい言葉かけ←できた時の達成感を味わわせる努力をしている。
- ・スクールサポーター…近所のバス停で見かける外国人のハーフの子ども。板書の字が写せないがやる場所を指示するとできる⇒できない子を放置気味の担任。
- ・スクールサポーター…1年生、クラス内での学習差－担任・学年教師・なかよしの教師の不安。4年男児（車椅子）…体育の時間はクラスの子ども達が、審判等の役割を決めて参加しやすい環境をつくっていた。
- ・キャンプリーダーで飯盒炊爨、まきひろいに行っても決められた時間、声掛けにも戻ってこない。グレーゾーンは、十人十色。
- ・3年男児…子どものサポートに、どんな接し方が必要なのか悩む。
スローペースな行動、教師や私の話は理解、ノート視写は時間がかかる←教員は配慮せず進めていく←特別支援教育でも定型発達の子にも分かりやすくする必要がある。
- ・自然学校リーダー、スクールサポーターの経験…子どもによって求める支援は様々←見守ることしかできなかった。
- ・スクールサポーター校は放課後のいのこり教育を実施。1年生 — 学級崩壊 — 基礎学力定着が困難。

(3) 学生が考えるグレーゾーンの子ども達への支援のあり方

実際に出会った子ども達に対して、何らかの支援をしたいと強く願う学生たちは、担任教師の指導を受けたり、自身で試行錯誤し実践を試みたりしながらボランティア活動に取り組んでいる。その経験から導いた子どもへの支援のあり方が以下のとおりである。

	学生が大切とする支援のあり方	名
全体	・保護者・担任・管理職との連携、情報共有	6
対 教 師	・教師の子ども（子どもの特性）理解	4
	・個に合わせた指導（個別指導の徹底）	4
	・子どもとの信頼関係	2
	・教師の環境設定（雰囲気づくり・教室内も含め）	2
	・子どもに他者を認め理解する姿勢と、思いやる精神の育成	2
	・教師の授業の工夫（分かりやすく、具体的な言葉で）	1
	・授業の中で成功体験を味わわせる	1
	・クラス内の助け合い	1
教師 ↓ 家庭	・家庭との信頼関係を結ぶ	1
	・保護者の状況把握（保護者の頑張りを認める人になる）	1
	・保護者との相談時間の確保と設定	1
	・専門家へのアプローチ	1

(4) 学生の学びと成果（正道教諭の講義から得たもの）・講義後の学生の変化

講義やボランティア体験等の中から得た学生たちの学びについて、2回ゼミ生20名のレポートの内容（各自3000字程度）から教師・学校・保護者・支援サポート教師の役割と子どもへのかかわりのあり方についてまとめた。

① グレーゾーンの子のとりえ方

障害が軽いため発達障害と気付かれない子、クラスの現状から一斉指導が成立しにくい、基礎学力をきちんと身に付けないまま学年が上がってしまう児童。

- ・適切なサポートが受けられなかった場合、二次障害に気付かずに適切な対処が行われずと症状・特性が強くなり始め「診断域」に入る。グレーゾーンでの対応が二次障害を防止・改善する。専門機関との連携、国の支援の方法、学校・担任の支援が求められる。
- ・グレーゾーンの子は身近にいる。すべての子に相談による成功体験と信頼関係を大切にすると共に、学校・家庭の連携、共通理念を持つことの教育効果は大きい。一人一人のニーズに合わせた教育方法で目標を考える。
- ・スクールサポーターで見かける子どもの3つのポイント
 - 1) 45分間座っていられるか
 - 2) 9歳の壁を乗り越えられるか（3年からは抽象的な思考や理解が求められる単元に入る）
 - 3) 友達とのコミュニケーションがとれるか

グレーゾーンは個性ではない、家庭内や学校で環境調整や工夫が必要、資質能力を高めていくことで、学級全体的な学力向上につながる。

② 担任の役割

グレーゾーンの子どもへの関わりについて、まず保護者との対話、教師同士が協力ししっかり子どもを見ることである。子ども達に特に否定的な言葉を使わない。その子に合わせた指導を教師は根気強く続ける。

- 1) 教師の子ども理解、一人一人の子どもを理解し、子ども達には、他者を認め理解する姿勢や思いやりの精神を持てるように学級づくりを大切に。クラス内の二極化に対する支援。
- 2) 家庭（保護者）との連携—子ども目線から伝える。

子どもの能力を担任が理解し、家庭・学校の連携が大切。家庭と教師の信頼関係をつくるには子どもと教師の信頼関係をしっかり結ぶことが大切。

- ・個別指導の徹底—教師同士の指導方法・指導内容の共有が不可欠、ローテーション指導。子どもが主役、その日に学んだことはその日のうちに、個別指導の重要性。
- ・グレーゾーンの子の二次的被害。子どもの特徴理解→保護者へのサポート。連絡を密に、連絡帳の活用（日々の出来事を知らせる）←子どものサポートにつながり、より良い学校生活が築ける。お世話係りの子をつけるメリットとデメリットがある。
- ・保護者・地域の方の支援。
- ・成功体験と信頼関係を大切に、支援する。
- ・教師同士の連携の回り方、担任・学年・管理職—子どもについて知っておく、継続的に個別にかかわり、個々に応じた指導、反復練習をさせる。
- ・グレーゾーンの子への支援が、他の子どもの学力向上につながる。支援体制を整え、個に応じた指導を行うことで、放課後学習の効果としては、できるという子どもの自信が自尊感情を育み、学級のボトムアップにつながり、学級経営が行いやすい。
- ・できることに喜び→学習に意欲的、自尊感情の芽生え、学級内でも積極的になる。

教師にとっては学級内の学習支援がより多くの児童にまで届き、双方の効果による学級のボトムアップが図られ、学級全体の理解度が高まり、授業の進度も少し速くなり、学級経営も行いやすい。ボランティア教師・シルバー人材を大いに活用すること。

③ 学校としての役割と成果

- ・学校は何をすべきか、教師の役割は、自校の教育活動について今のままで良いのか等を常に考え、PDCA機能を生かす。
- ・家庭・学校との共通理解と連携が必要。
- ・グレーゾーンの子への対応で必要なこと — 教師同士の連携や外部支援員と教師、教師と

保護者の連携。定型発達と発達障害の間の境界領域を示す。二次的被害を生じさせない。

- ・グレーゾーンの子どもへの適切な支援←本人、周りの子どもにとっても一緒に学ぶ環境を創り、学力向上を目指すうえで非常に大切。
- ・学力向上を目指し、基礎学力定着のための支援⇒学力が向上し、自信につながり、やる気が起こるきっかけとなりすべての子の学力向上につながる。
- ・「すすく教室」の設置…退職教職員、教職経験者を活用し、放課後支援のあり方の実践を通して考察していく。

これまでの成果として「すすく教室」週1回5限終了後…3学年児童、基礎計算習得がこの学年で完成。百マス計算、不正解の原因 → つまづきを分析 → 感想・結果・目標、振り返りカード（児童のモチベーションをあげる） ⇒ 保護者・担任・管理職へ報告 ⇒ 成果 個別の計算スキルの指導と反復練習により、計算の正確性を身に付け、和・差・積の計算に関しての基礎力の平均的な力を付けることがほぼできたととらえられる。

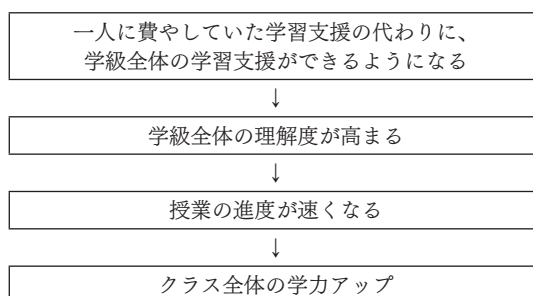
④ 学力向上教員の役割と支援とその効果

- ・グレーゾーンの子ども達の学びの支援を行うために、放課後の時間を有効に使い、少人数制で勉強を教える。ボランティアは長年教師をしていた方 — 教授のスキル、地域の子どもを支える、老後の社会貢献となり、担任は先輩から学ぶことも多い。
- ・グレーゾーンの子どもについて、もっと多くの人に知ってもらい、理解してもらいたい。
- ・「すべての子どもに確かな学力を」基礎学力の定着の必要性。

下校時の10分程度の補習、その日の課題をその日のうちに解決。問題を積み重ねない。その子に合った支援方法を見つけ、サポートしていく。

- ・放課後の学習支援、百マス計算や基礎計算練習、漢字練習⇒できる⇒自信につなげる。
- ・〈支援のあり方の図〉

グレーゾーンの個への支援を見ると、その影響はクラス全体に広がっていく。



- ・支援のあり方
 - ① できること、できないところの境界線を明確にする。
 - ② 時間や正確性、最後までやり遂げたこと、しっかり褒める。
 - ③ どこでつまづいたかを本人と共有し、視覚的方法を用いて指導。ワークシェアをし、連携を取り情報を共有、その子に合った支援の仕方で行っていく。
- ・放課後の学習支援、百マス計算や基礎計算練習、漢字練習 ⇒ できる ⇒ 自信につなげる。学生ボランティア、定年した教師が参加する。
- ・百マス計算分析方法 — 記録から、伸びやこれからの課題を本人に伝えると共に保護者、教師にも見せて、次回のモチベーションにつなげる。
- ・放課後10分間の支援も効果的である。
- ・「確かな学力」を付けていく一つの方法として 放課後支援の効果、成功体験、分かる楽しさを伝える。⇒ これからの学習の意欲につながり、今までの挫折体験がこれからの力になっていく。分からないと言えない子への教師の声掛け、子どもとの話易い関係づくりは、予防的な学習につながる。
- ・「困った子ども」ではなく「困っている子ども」、教師は困っていることを理解し、教師と保護者の支援を行う。

⑤ 家庭・保護者

家庭（保護者）・担任・学校…共通理解と連携が必要

〔参考例 学生Aのレポート〕

グレーゾーンの子どもとは～私達にできる支援～

「すべての子どもに確かな学力を」という目標を掲げている学校が多く存在する。「確かな学力」とは義務教育で習う基本的な読み書き計算であると考えられる。しかし、学校には様々な発達段階・学習理解の子どもがおり、その「確かな学力」が十分に身に着けられていないまま、学年が上がっていく子どもがいる。私がスクールサポーターをしている小学校でも1年生の段階からすでにクラス内で学習の差があり、その点において担任・学年の先生やなかよし学級の先生は不安を感じている。

これから私の経験談やグレーゾーンについての講義、文献などを用いて私達ができるグレーゾーンの子どもの支援について考える。

まず、「グレーゾーンの子どもの」とはどんな子であろうか。講義前は学習面において不安のある児童というイメージを持っていた。例えば一つ一つに取り組むスピードがゆっくりであったり、授業が理解できず周りについていけなかったり、本当は分かっているのに分かっているふりをするといった勉強面において支援が必要な児童であ

ると考えていた。具体的にLDの子どもや診断が出されていないが、明白に学習の遅れがある児童が該当すると考える。グレーゾーンについての講義を通し、その子どもについての印象が拡張した。それは学習面だけではなく、日常生活において配慮や理解の必要な子どもも含まれるということだ。例えば落ち着きがなく授業中にウロウロしてしまったり、先生の話に集中して聞けなかったり、話すのが苦手に対人関係を築くのが苦手であったりする子どもである。具体的に自閉症、アスペルガー症候群、ADHDの子どもや多国籍児童、なかよし学級の子どものなどが該当すると考える。そこから、グレーゾーンの子どものとは日常生活や学習において少し配慮が必要な子どもであるといえる。

グレーゾーンの子どもの知的な遅れがないか、あってもごく軽度であり、社会の中で生活するに当たり学習や対人関係、行動の適応につまずきがある子であることが分かった。次に、グレーゾーンの子どもの支援について考える意義について述べていく。そのような子ども達について知り、どのような支援が必要か考え対策することは、クラス・学年・学校の多角的な理解と全体的な底上げに繋がると考える。文部科学省によれば、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能自閉症等、学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒数について、文部科学省が平成24年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果では、約6.5パーセント程度の割合で通常の学級に在籍している可能性を示しているという。つまり、30人のクラスの中に2名程度、3クラスであれば学年に6名程度支援の必要な子どもがいるということになる。学習面において支援が必要な子どものフォローがされると分からない所が分かるようになり、勉強嫌いの克服や「勉強ができる」という自信、自尊感情の向上などを図ることができる。支援をそれほど必要としない子どもにとっても効果的である。教員が支援の必要な子どもに付きっきりになる時間が短縮されたことで、全体に目が行き届くようになり、授業がスムーズに進むようになる。それにより学習環境が整えられ、学力の向上を図ることができる。日常面においても、支援の必要な子どもを教員が理解することで、周りの子どもとその子の関係性を作ることに繋がると考える。教員が支援の必要な子どもとどのように関われば良いかやどんな言葉掛けをすればよいかを示す。また周りの子が「あいつは変な奴だから関わりたくない」と否定的な感情を持ち、関わることを拒絶したとする。その時、支援を必要とする子が相手に表現できていないことや伝えきれていない意思を教員が汲み取り、繋ぐことで子ども達が他者理解しようとする事ができる。つまり、グレーゾーンの子どもの支援を行うことは、学習環境を整え全体の学力向上や一人一人の子どもの理解することができるという点に意義がある。

ここから、具体的にグレーゾーンの子どもについての支援について考える。現状として、幼児期に保育所や幼稚園、家庭などでの遊びや絵本の読み聞かせなどの経験が豊富であった場合、小学校の入学後「もう知ってるからできる！」とひらがなやカタカナの読み書きや数の足し算、引き算ができる子どもがいる。一方、幼児期に保育所や幼稚園や家庭での遊びや絵本の読み聞かせなどの経験が少なく文字や数に触れる機会があまりなかった場合、一つ一つが初めてであるため、理解することや取り組むことに時間が掛かる子どもがいる。クラスではこのような二極化が見られる。そこから私たちができる支援方法として大きく2点考えた。

1点目は、教員自身が一人一人の子どもを理解し、子ども達に他者を認め・理解する姿勢を持たせる。発達障害や身体障害などの診断が出ている子どもの場合、その診断や子どもの様子を参考に具体的にどのような場面でどのようなことに困難を感じているかを把握する必要があると考える。私がスクールサポーターをしている小学校では、4年生に車椅子で下肢に障がいのある子どもがいる。その子は、友達と会話することや勉強に不自由はなく、歩くことや立つことも少しできる。しかし長時間できないため、授業でボールを使った踊りの練習をしていた時、先生が傍につき、その子がボールを落としてしまうとすかさず拾い上げ、次の動きについていけるよう支援していた。先生自身がその子が車椅子から降りて立つことができるが、バランスを取ったり、動きをしたりすることに困難さがあると理解しているため、できた支援であると考えている。また、サポートをする中でクラスの子どもが車椅子の子どもを理解し、支援している場面が見られた。それは、体育館に移動する際に車椅子の子どもに先生は付き添い、他の児童は団体となって静かに移動していた。また授業の際に、車椅子の子どもがクラスの傍で座れるよう、気がついた子が椅子を置いてあげていた。バスケットボールの授業では周りの子が「〇〇君（車椅子の子）は最初、審判をして僕たちがどこにパスすればいいか声掛けして。」などみんなのできるよう考慮している姿が見られた。クラスの子ども達はその子を理解し、どうしてあげたらいいか考える姿勢を持っているためできた行動であると考えている。以上のことより、教員が理解した上で子どもにも他者について考え行動させることが重要であると考えている。

2点目は、家庭との連携を行い、子どもへの理解や支援を考える。子ども達の生活は、半分が学校でもう半分を家庭で過ごしている。グレーゾーンの子どもの中には、家庭では全く気付かれていないという場合もある。そのような子どもを学校だけで支援していることは極めて難しく、家庭の協力や理解が必要である。家庭ではどのような様子なのかということと学校で過ごす姿や困難としていることを照らし合わせ、共通理解していく。その時、「〇〇ちゃんは指示を聞いてくれなくて（私が）困っています。」というように伝えるのではなく、「指示が理解できないことがあり、周りについていけ

「ず本人も困っているようです。」と言い換え、子どもの目線から伝えていくことが重要であると考えます。

以上のことから、グレーゾーンの子どもの支援として教員自身が一人一人を理解し、子ども達も他者理解し思いやりの精神を持つことと、家庭と学校の共通理解と連携が必要であると考えます。

参考文献・引用文献等

- ・文部科学省 特別支援教育について「平成24年度 通級による指導実施状況調査結果について(別紙2)」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1334907.htm

(5) 大学での学びのあり方(大学での授業のあり方)

「グレーゾーンの子ども」について学生たちは、語彙としてのグレーゾーンと教育活動に関するグレーゾーンとしてとらえられている。

実際に、小学校教師が考えるグレーゾーンは、もっと広義にわたっているものであることを丁寧に伝えなければならない。小学校教員をゲスト講師に迎える講義の実施には、学生が授業のテーマにどれだけの課題意識を持って臨んでいるかが大きなカギとなる。

今回の取り組みは、学生たちの課題意識の中からグレーゾーンの子どもたちへの支援のあり方や小学校教師は実際にどのような取り組みをしているのかを学びたいとの強い要望により実現したものである。学生たちは小学校教師の日々の実践について指導を受けるまでに、グレーゾーンの子ども達についてどのようにとらえ、どのような支援が必要なのかを調べたり、大学でのこれまでの学びを振り返ったりするなどして自分たちなりに考えをまとめてきていた。その予習を行ったことにより、課題に対する問題意識を持って授業に取り組むことが出来た。この姿勢が、講義内容をより深く理解していくことにつながったといえる。

新しい課題に取り組む場合も学生なりに事前に調査し、課題意識を明確にもっておくことが講義を有効にかつ学生自身の深い学びに繋がっていった。

学力に課題がある子どもへの支援のあり方については、教科教育法の授業の中でどの内容に子どもが多くのかみつきを持ち、学習の理解不足が起こっていくのか、教師を目指す学生にはその指導法も含めた授業展開が必要になってくる。特別支援教育の授業でも丁寧な指導を受けているからこそ、学生たちは普通学級で課題を持つ子どもに日々の授業での対応に不安を感じているのではないかと考える。

「すべての子ども達に確かな学力を」の教育目標により近づくために、大学教育においても各教科の特性と指導方法は勿論のこと、一人ひとりの子どもたちの理解と確かな見守りが出来るようにグレーゾーンの子ども達への指導のあり方について深く学んでいく必要がある。

4. 結論と今後の課題

「普通」とは何か、それはその集団の中の平均に近いだけである。違いを排除するのではなく、それぞれを認め合いながら「お互い様」の気持ちで共生していくことが大切である。

これまでの研究の結論は、4つ考えられる。

- ① 個に応じた指導、反復練習をさせることが基礎学力を伸ばす。
- ② 教師陣の連携での放課後支援 — 子どもたちは喜びを持ち、意欲的に学習に取り組むことになった。自尊感情が芽生え学校内では以前より積極的に活動。担任も学級内の学習支援がより多くの児童にまで届き、双方の結果、学級のボトムアップにより、学級全体の理解度が高まり、授業の進度も少し速く、学級運営もより行いやすくなる。
- ③ ワークシエアの発想が効果的、シルバー人材確保と活用に効果がある。
- ④ 短時間の基礎計算練習百マス計算は効果的である。

この取り組みを通して、子どもの感想からは、「これからも頑張ります。やった一百点」というような自信にあふれたコメントに変化し、子どもは自尊心と積極性を持つことができる。体験からの知識獲得の重要性を認識し、個々の子どもに合った指導を行うことにより子どもの人生に変化をもたらすことがある。子どもの学習の理解度を把握し、学校全体で保護者も一緒に考えていく姿勢が必要である。

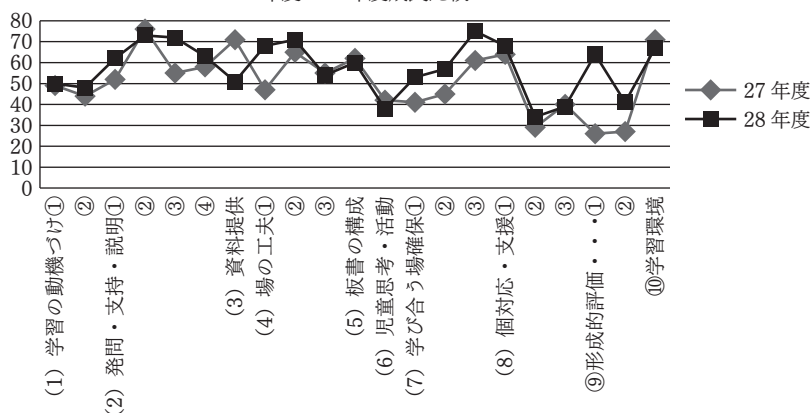
グレーゾーン（学力に課題のある子ども達）は、適切な支援によって困難が解消される可能性が高く、担任の責任と役割は子どもの将来を左右するほど重要である。学生はこれらの学びを通して、教師になった時の自分の重要な役割として理解し位置付けていくことが大切である。

さらに、学生にはボランティア活動、スクールサポーターに積極的に参加し経験を積み、未来につなげるために今できることをきちんとやることが求められている。それを叶えることができる余裕のある社会の構築を目指すべきであるが、今は学校教育の中においてできることを管理職と担任と保護者の連携を図り、学校としての子どもの力量形成プログラムを構築し、提供していくべきである。

大学の授業に、このように現役教師との連携授業を多く取り入れることは、一人ひとりの子どもに寄り添い理解することの大切さや子どもを見取るとはどのような事なのかを学ぶ良い機会となる。本当の児童理解が出来てこそ、子どもの能力に沿った確かな学力を培っていく教育活動ができる。

昨年度の研究論文「生活科の学びと力量形成のあり方—授業改善シートを活用して—」の中にある現場教師や学生の授業評価項目(7)「学び合う場の確保」や(8)「個への対応・支援」、(9) 形成的評価と柔軟な授業構成 の結果が低かったのは、この研究で示した学力に課題のある子どもの個への対応に深くかかわっていると考える⁸⁾。

27年度・28年度成長比較



[上記グラフの項目は、調査項目より抜粋]

⑦学びあう場の確保

- ・児童の話し合いが広がっていくように助言していく。
- ・発表者以外の子どもの観察（動き・表情・目線）。
- ・子どもの発言に対して、うなずき、問いかけ、ゆさぶりをかける。

⑧個への対応・支援

- ・机間指導中は、授業の理解度、姿勢・ノートの使い方、身辺整理の仕方等について気がついたことは指導していく。
- ・逸脱行動をしている児童には、授業に関わりある話をし、注意を引き戻すようにする。
- ・ノートの使い方、丁寧な字が書けているかを机間指導しながら指導していく。

⑨形成的評価と柔軟な授業構成

- ・子どもの表情等を確認しつつ、全員を常に視野に入れながら授業を進めていく。
- ・1時間を変化のある繰り返して組み立てる。

どの子どもにも基礎的な学力の定着を図るためには、大学での学びの中に授業力とともに「個への対応・支援」のあり方に関わる本研究実践は重要と考える。今後の研究においても、この関連性を明らかにし、現職教師の力量形成のあり方と大学での授業のあり方についても考察していきたい。

注

- 1) 正道 幸子 (2014) すべての子どもの学力向上をめざして—グレーゾーンの子どもの学びの支援—
平成26年度 放送大学大学院修士論文.
- 2) 定本 ゆき子 (2010) 『発達障害の臨床心理学』「発達障害と非行」東京大学出版会
- 3) 読売新聞 (2012.10.3) 「大人の発達障害 (上)」
- 4) 藤岡 秀樹(2010) 学校心理学から見た教育相談・生徒指導—予防的・開発的視点に焦点を当てて—
京都教育大学教育実践紀要 第10号 2010
- 5) 川合 紀宗 (2009) IDEA2004の制定に伴う合衆国における障害判定・評価の在り方の変容について
特別支援教育実践センター研究紀要 第7号59-68. 2009
- 6) 岸本浩史 (全国家庭塾連絡会) (2004) 「新・寺子屋宣言」清風堂書店出版部
- 7) 岡崎友典・玉井康之 (2010) 「コミュニティ教育論」3 学校と地域社会 (1) 財団法人放送大学教育
振興会
- 8) 研究内容等の詳細については、下記の文献を参照
 - ・藤池 安代 (2017.3.20) 生活科の学びと力量形成のあり方—授業改善シートを活用して— 神戸
親和女子大学児童教育学研究第36号